



#23

御言葉のお告げ

著・藍澤たすく

イラスト・かもめ遊羽

「これより巳の刻まで、すべての角における厄災が汝に降りかかるであろう」

「すべての角における厄災？　なんだこりや？」

スマホ片手に登校していた岸辺巖は、突然舞い込んだ奇妙なメールに顔をしかめた。

「げんちゃん！　おっはー！」

「おわっ!？」

巖の背中に突然飛びついてきた制服姿の少女は、彼に抱きついたままスマホの画面を覗き込んだ。

「うっわー、大変！　げんちゃん、それ御言葉だよ、御言葉！　御言葉からのメール！」

「なんだよ、御言葉って？」

「えー、げんちゃん知らないのー？　有名だよ、御言葉！　こうやってメールでいろいろ未来のことを知らせてくれるの。祐子もこの前、御言葉のおかげで事故るところから助かったのよ！」

「そんなうさんくさいもん知らねーよ。それより暑苦しいからさっさと離れよ、真紀」

「んもう、御言葉が厄災が来るって言ってるんだよ！　今日はもうおとなしく帰った方がいいよ！」

「っせーな、だから離れるつつってんだろ！　当たってんだよ、さつきから！」

「当たってるって何が？」

「いいから、ほら！」

巖はやつとの思いで真紀を自分から引きはがした。まったく朝からいい迷惑……というか、良い迷惑だったぜ……。

「ねー、げんちゃん。悪いことは言わないから、本当に今日は学校休んで家にいたほうがいいよ？」

「はっ、ばかばかしい。俺にいったいどんな厄災が降りかかるって言……」

がっしやーん！

「げんちゃん!？」

「ててて……」

巖は突然曲がり角から飛び出してきた蕎麦屋の配達員の自転車にぶつかって盛大に尻餅をついた。地面に転がり落ちた蕎麦屋の店員も、巖も、等しく蕎麦まみれになっていた。

こんな朝早くからこんな大量の蕎麦を注文する人がいるのかと訝しく思うほど見事なまでに蕎麦まみれだった。

「ね、げんちゃん？　当たったでしょ？」

「た、たまたまだ！」

巖は体についた蕎麦を振り払うと、何事もなかったかのようにそのままのっしのっしと歩き始めた。

しかしその後も彼は曲がり角ごとに、パンをくわえて走ってきた転校生（推定100kg）や、郵便配達のパイクなどなどに、ことごとくぶつかりまくっていったのだった。

「ゼーゼー……痛てて……ゼーゼー……」

「ほらね。御言葉のメールを無視するからこんな目に遭うんだよ。やっぱり今日はおとなしく帰ろうよ。ね、げんちゃん？」

「ぐ、偶然だ！俺はそんなオカルト、絶対信じないからな！」

二人は今、曲がり角のない、まっすぐな川のほとりの遊歩道を歩いていた。

これなら学校までは多少遠回りになるが、角で何かぶつかる心配はないだろう。

「ねー、本当に帰らないの？げんちゃん？」

「当たり前だ！俺は雨が降ろうが槍が降ろうが、絶対学校に行くからな！」

「んもう、げんちゃんは頑固だな、んもう！」

「ぶもう、ぶもう！」

「なんだよ、真紀。変な声出すなよ」

「今のあたしじゃないよ？」

「ぶもう！」

「ぶもう？」

振り返った二人が見たのは目を血走らせ、口から涎をだらだらと垂らした黒い鬮牛だった。

「うわーっ!」

黒牛は巖がけて一直線に突進してきた。

巖は鬮牛士さながら、ぎりぎりのところでその巨体をかわす。

勢い余った黒牛はそのまま川に飛び込んで流されていった。

「な、なんでだよ!? 曲がり角なんかねーじゃん! ここまっすぐ一本道じゃん!」

「げ、げんちゃん、あれ!」

突然真紀が呆然とした様子で川下を指さした。

そして巖はその方向を見て驚愕した。

川下の方に何か灰色の巨大な霧のようなものがかかっている。

いや、あれは霧ではない。砂煙だ。

そしてドドドドドという腹の底にくる低い地響き。

これは一体……。

やがて砂煙の中からおびただしい数の「何か」がその全容を現した。

それはサイ、バッファロー、バイソン、牛、カモシカ……とにかくすごい数の動物が群をな

してこちらに向かつてきている姿だった！

「な、なんだありやあ!」

あまりの事態に巖は逃げることも忘れ、ただその場に立ち尽くした。

「市内の皆様は緊急のお知らせです。先ほど市営動物園と木上サーカスから一斉に動物が逃げ出したのでございます。繰り返します。市営動物園と木上サーカスから一斉に動物が逃げ出したのでございます。危険ですから市民の皆様は外出を控え、自宅から出ないようにしてください!」

電柱の上に設置してある市の防災スピーカーから、いやに冷めた職員の声がした。

「む、むちゃくちゃだあ〜!」

ようやく我に返った巖は脱兎のごとく走り始めた。

動物達の群はもう背後20メートルほどまでに迫っている。

ふと横を見ると川の中には日本に生息しないはずのイッカクまでもが泳いでいる。

その姿を見て、巖の横を走っていた真紀がぼん、と手を打った。

「わかったわ、げんちゃん!」

「何がだよ!」

「これは【すべての角における厄災】だわ!」

「なんだそりゃあああ!」

言われてみれば今追っかけてきているのはすべて「角のある動物」だ。なるほど、確かにそうだ。真紀、頭いいな。

「つて、感心してる場合かー!」

巖は他の生徒達を押しつけながら校門をくぐり、校舎へと走った。背後から動物達に追いつかれている生徒達の阿鼻叫喚の声したが、構っている暇はない。下手をするとこっちもやばいのだ。

「げんちゃん、早く!」

上履きに履き替える余裕もなく、校舎に入った巖達は土足のまま階段を駆け上がった。

ずしんずしんと音を立てて校舎が揺れている。どうやらサイを始めとした巨大な動物達が校舎に体当たりをしているらしい。

「へっ、やっぱりしよせん動物だな。階段をあがってここまで来るほどの脳味噌はなうわあっ!」

4階まであがったところで、巖は30メートルほど先の階段からさっきの黒牛が飛び出してきたのを目撃した。いつの間に川から上がってきたのだろう。

怒り狂った黒牛は廊下にいる生徒達をはね飛ばしながら、猛然と巖たちの方に向かってきた。そしてあつという間に距離を詰められる。

(もうおしまいだー!!)

巖は黒牛を目の前にしてぎゅっと目をつむった。

ッパーン!

乾いた発砲音とともに、ずしんと黒牛の巨体が廊下に沈んでいった。

「岸辺くん、こっちょよ!」

「翔子先生!」

振り返った巖が見たのはクラス担任の翔子だった。いったいどこで手に入れたのか、その豊かな胸の前には黒光りしたライフルが掲げられている。

翔子は素早くライフルで自分についてくるよう、巖たちに合図した。

「校舎裏の備品倉庫よ! あそこなら扉も頑丈だし、動物達も入ってこれないわ! 早く!」

「はい、翔子先生!」

クラス担任について備品倉庫に向かおうとした巖は、突然、額に違和感を覚えた。

「でも、あなたはここで死になさい」

「……翔子先生?」

いつの間にか、巖の額に、翔子がライフルを突きつけていた。

瞬間、巖は気がついた。

翔子のフルネームは……角翔子……。

つまり。

「【すべての角における厄災】……」

「ふふふ、その通りよ。御言葉のお告げは絶対なの!」

翔子は怪しい笑みを浮かべると、ゆっくりと引鉄にかけた指に力を込めた。

「翔子先生、ごめんなさい!」

「あうっ!」

いつの間にか翔子の背後に回り込んでいた真紀が、掃除のモップの柄で思いっきり翔子の後頭部をジャストミートした。翔子はそのまま静かに床の上に昏倒する。

「げんちゃん、早く!」

倒れた翔子のポケットから備品倉庫の鍵を奪うと、真紀と巖はまた一目散に走り出した。

ガチャリ

「ふー、施錠完了、つと……」

なんとか無事に備品倉庫にたどり着いた巖たちは重い鉄扉の鍵を締め、ようやく安堵の息を

ついた。

「なあ、真紀。メールにあった巳の刻って何時なんだ？」

「えっとねー。10時だから、あと1時間くらいだよ」

「それまでここに隠れてれば、助かるのか……ふー……」

巖は鉄扉に背中を預けて、その場にずるずると座り込んだ。

「ねー、げんちゃん。それまで暇だからなんかして遊ぼうよー。ここってこの学校が始まって以来の備品とか調度品とか、たくさんあるんでしょ？ ……あ、すごいアンティークな将棋

盤があるよ！ 可愛いー！ そうだ！ げんちゃん将棋やろう、将棋ー！」

「ったく、おまえ、よくこんな時にそんなのんきな事言えん……」

顔を上げた巖が見たのは、将棋の「角」の駒を左手に持ち、右手に日本刀を持った真紀の姿だった。彼女の瞳からはすでに光は失われ、その顔には歪な笑みが貼り付いていた。

「ねー将棋。シヨウギ、殺ろうよ、ゲンチャーン」

「【すべての角における厄災】……」

巖が呟くのと、真紀が動いたのはほぼ同時の出来事だった。

おしまい